昭和六十二年度　特別研修員研究発表要旨

法蔵の智儼観

――『捜玄記』の背景及び位置について――

織田顕祐

中国における仏教の展開の中に華厳教学を位置づけようとするとき、一般に華厳教学の大成者であると評されている賢首大師法蔵が師智儼の『捜玄記』執筆を以て「立教分宗」であると押えていることは極めて重要な意味を持っていると考えられる。何となれば、智儼の師である至相寺智正は地論宗南道派の系列に属する人であり、従って智正・智儼・法蔵と続く流れの中で法蔵が智儼を前述のように押えていることは、何らかの意味で地論宗との質的な展開が智儼において為され、それを法蔵は華厳学の独立とみていると考えることができるからである。更に法蔵は智儼が『捜玄記』を書く直接のきっかけとなったことを「別教一乗無尽縁起」を悟ったことによると端的に表現している。実際に智儼自身の思想がそこまで明瞭なものであったか否かについては若干の疑問がないわけでもない。従ってこの表現そのものは法蔵自身の背景との関係で考えるべきであろうが、法蔵がそのように言わなければならないことの意味が吟味されるべきである。地論学・摂論学・華厳学という一連の流れの中で華厳学の位置づけを考えようとすれば、法蔵が智儼をどのように見ているかという問題が極めて重要な意味を持ってくることになるであろう。その点を明らかにするのが本稿のねらいである。そこで法蔵が「別教一乗無尽縁起」として押えている智儼の思想について若干の検討を加えてみたい。

初めに「別教一乗」という概念について吟味を加えることにする。結論的に言えば、「一乗」という視点についてはこれを地論教学の伝統の中から受け継いだものではない。何となれば、智儼が終南山至相寺において『華厳経』を師事していた智正や、智儼が教理的に大きな影響を受けたと考えられる浄影寺慧遠らの思想の中心的なものは二蔵判と呼ばれる小乗大乗判であり、その中には「一乗」という視点は全く見られない。彼等は後期地論学派を代表する人々であり、従って彼等の思想は地論学の伝統の集大成であると考えることができるから、智儼における「一乗」という概念の確立はそれらとは別の思想によって為されたものであると考えるのが自然である。このような視点に立つとき、『捜玄記』が『摂大乗論抄』を引用していること、『摂大乗論』を北地に伝えた曇遷の思想と智儼とが極めて近い関係にあること、などが極めて重要な意味を持ってくることになる。何故ならば、浄影寺慧遠らにおいては『摂大乗論』を知ることがあまりにも遅すぎたために、それによって自己の思想を再構築するまでには至らなかったからである。従って『摂大乗論』北地伝播の持っている意味が大きければ大きいほど、旧来の教学との間に生ずる問題点の解決が急務となったことであろう。智儼が『捜玄記』以来『孔目章』に至るまで一貫して重用する「小乗・大乗・一乗」という視点は、『摂大乗論』によって示されるものであるが、正に従来の思想を含みながら全く新たな境地を示すものと言うことができる。そうした新たな視点が、北地の伝統的な『華厳経』研究と結びついた

時に開かれる思想が「華厳一乗」という概念なのである。

次に「無尽縁起」という視点について考えなければならない。法蔵の無尽縁起という言い方は「法界縁起」という用語と同義語であると考えられるので、ここでは『捜玄記』十地品第六現前地において体系的に示されている智儼の法界縁起説を材料としたい。それについて、この部分の内容そのものに関しては既にいくつかの研究が示されており、ここではそれがある流れの中でどのように位置づけられるのかという点に焦点を絞りたい。『捜玄記』において法界縁起説が示される所釈の経文は三界唯心を説く著名な部分である。この経文が地論学の心識説の根本的な依りどころであったことを考慮に入れれば、智儼の法界縁起の思想も内容はともかくとして形式的にはそれらの延長として見なければならないであろう。そこで浄影寺慧遠の『大乗義章』の「八識義」によって地論学の心識理解と智儼の法界縁起思想との関係を考えてみたい。「八識義」そのものは『大乗起信論』『四巻楞伽経』『勝鬘経』などを主な依りどころとしており、末後に若干『摂大乗論』にも言及するという体裁となっている。また慧遠は『大乗義章』以外の著書では、一切『摂大乗論』について関説していない。このことは既述のような慧遠の時代的な背景を如実に物語るものと言うことができる。このような理由によって慧遠の心識理解の根底をなすものはどのような場面においても基本的には伝統的な真妄観である。従って縁起法において生死的な側面を説くにしても涅槃的な側面を説くにしてもそれらはいずれも真識の用きとして把握されることになる。一方智儼は、法界縁起に二門を立てて凡夫染法に約す場合と菩提浄分に約す場合としている。このことを原点である「三界唯心」の経文に則していえば、この「心」を真識と解して虚妄法との相即関係として縁起法を説かねばならなかった慧遠の立場と、そうした慧遠の思想を充分に受け入れながらそれを法界縁起における染分と浄分とした智儼との間には随分と大きな思想的展開があるように思われる。智儼はこの法界縁起の思想を明すにあたって「大経本に依る」としているから、それが『華厳経』をよりどころとするものであることは言うまでもない。慧遠らも充分『華厳経』を研究しながら遂に智儼のような視点を持つには至らなかったのであるから、智儼におけるそのような展開を可能にしたものは一体何であったのか。智儼と慧遠との内的な要求の相違のみでは片づけられないように思われる。

このような視点に立って改めて、『摂大乗論』をほとんど知り得なかった慧遠と知悉していた智儼との関係、又『摂大乗論』が縁起法、つまり識の依他性について染分と浄分とを立てること、などを考えあわせてみると智儼の思想的展開の背後に『摂大乗論』の存在を見ることもあながち牽強付会なことではないと考えられる。この他にも智儼と同時代にほぼ同じ地域で活躍していた道宣が、智儼を評して「華厳と摂論、尋常に講説す」と言っていることは、恐らく道宣が直接に見聞したことに違いないから、これによっても智儼と『摂大乗論』との関係を窺うことができよう。

以上によって法蔵が智儼の『捜玄記』撰述を「立教分宗」と押えようとすることの意味がほぼ明瞭になったであろう。それは大きく言えば、地論宗の教学が『摂大乗論』に出会うことによって全く新たな展開を示したものであると言うことができる。